場
12画

ジョウ（ヂャウ）
ば・にわ

易（よう）は玉（ぎょく）（日）を台（一）の上に置き、玉の光が下方に反射する形。易は霊の力を持つと考えられた玉によって、人の精気を盛んにし、豊かにする魂振（たまふ）りの儀式をいい、その儀式の行われるところを場という。また神を祭るところを場といった。

（白川静「常用字解」平凡社 より）

淡座

江戸にまなび、音と言葉のあわいをえがく

淡座（あわいざ）は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイショングループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでも、とりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものの在り方を模索し、作品や演奏として発信しています。

「バッハの場」今後の開催日程

2021年 9月18日㊏・10月23日㊏
11月20日㊏・12月18日㊏

会場……安養院 瑠璃光堂（東京都板橋区東新町2-30-23）

詳細は、淡座ウェブサイト、SNS等で更新してまいります。

入場料：各回 2,000円（限定60席）・配信チケット：各回 1,000円

メール：info@awaiza.com ・お電話：080-4091-6491

◀次回のご予約はこちら

配信チケットのご購入はこちら▶
本日の演奏をアーカイブで
もう一度お楽しみ頂くこともできます

淡座リサイタルシリーズ Vol.2
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会

バッハの場（にわ） 第2回

日時　2021年8月21日㊏
15:30開場・16:00開演

会場　安養院 瑠璃光堂

淡座 AWAI ZA

三瀬 俊吾（ヴァイオリン）
竹本 聖子（チェロ）
桑原 ゆう（作曲）

今回は、本條秀慈郎はお休みです

映像協力／株式会社たんどる
宣伝美術／桑原ゆう
主催／一般社団法人 淡座
共催／安養院

バッハの音楽は「場（にわ）」になる。
「距離を取る」ことが求められる今こそ追求する独奏で
「場」に触れ、疫病退散を祈念する連続演奏会。

淡座（あわいざ）リサイタルシリーズ Vol.2

バッハの場（にわ）

第2回

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会

awaiza.com

感染症対策のひとつ「人と人との接触を最小限に留めること」を逆手に取り、独奏を追求するリサイタルシリーズ。

ひと月に１回ペースの全６回公演で、三瀬と竹本が、バッハの無伴奏全曲演奏に挑戦。桑原作品を組み合わせたプログラムで、ふたりの独奏を存分にご堪能いただきます。第６回は、ゲストとして、安養院にゆかりのあるフルート奏者、瀧本実里さんをお迎えします。

各回、アフターイベントで作品や演奏をさらに深堀りし、次の回につなげていきます。第３回以降、安養院内庭園舞台での演奏も検討しており、バッハの「場（にわ）」を淡座ならではの視点で、多角的に追求する試みです。

● 曲目と解説

いよいよ独奏の深みへともぐっていく、第２回。

J.S. バッハ／無伴奏チェロ組曲 第２番 ニ短調 BWV1008

1. プレリュード　2. アルマンド　3. クーラント
4. サラバンド　5. メヌエット　6. ジーグ

バッハの主要な器楽作品の多くは、ケーテン時代（1717~23 年）に作曲された。当時、低音弦楽器はヴィオラ・ダ・ガンバが愛用されており、チェロは音楽先進国イタリアでも、まだ新参者として扱われていた。バッハは、他の楽器や声を伴奏する役割だったチェロの可能性を最大限に発揮させる作品を試みたのである。

明るさあふれる第１番と対照的な第２番の組曲。１拍目から２拍目に押し寄せる波のようなフレーズを持つプレリュードに始まり、その後５つの舞曲が続いていく。

アルマンドは、短いアップビートが付いた真面目な雰囲気の音楽。クーラントは、組曲の中で最も疾走感がある。サラバンドは、１拍目から２拍目へと、大波小波が押し寄せる。拍の伸び縮みする様子が、官能的ともいわれた所以だろうか。メヌエットは１部と２部に分かれ、１部は充実したハーモニーとバスの下行音型が特徴的。２部は素朴な温かさがある。終曲のジーグは、冒頭の力強い音の跳躍が印象的な、どっしりとした３拍子の舞曲である。

（文／竹本 聖子）

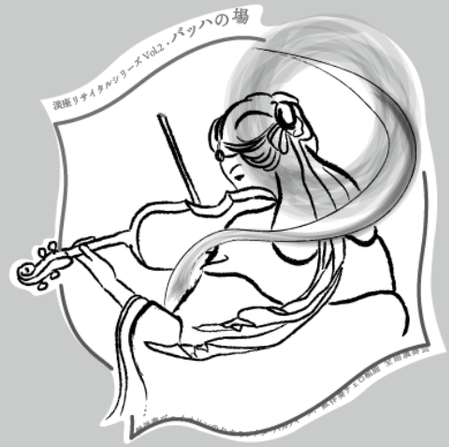
J.S. バッハ／無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第１番 ロ短調 BWV1002

第１楽章　Allemanda アルマンダ 4/4 — Double 2/2
第２楽章　Corrente コレンテ 3/4 — Double. Presto 3/4
第３楽章　Sarabande サラバンド 3/4 — Double 9/8
第４楽章　Tempo di Borea テンポ・ディ・ボレア 2/2 — Double 2/2

パルティータはいろいろな意味を持つが、この場合は舞曲を集めた組曲である。この１番のパルティータは、全ての楽章に Double（ドゥーブル）という変奏（ヴァリエーション）が付いており、一時的な転調はあっても、全体の調性はロ短調で統一されている。

バッハは《平均律クラヴィーア曲集》で 24 の全ての調性を用い、その手法はショパンの《24 のプレリュード》や、ショスタコーヴィチの《24 の前奏曲とフーガ》に繋がる。バッハは、調性に対してとりわけ敏感な作曲家の先駆けのように感じられる。バッハのロ短調の作品で真っ先に思い浮かぶのが「ロ短調ミサ」と呼ばれる《ミサ曲ロ短調 BWV232》であろう。「ロ短調ミサ」は最晩年に完成された、バッハの集大成のような作品である。バッハはパルティータの１番に、何故ロ短調という、決してヴァイオリンで弾きやすいわけではない調性を選んだのか、思いを馳せるばかりである。

第１楽章のアルマンダは、フランス語で「ドイツ風」を意味する。時代によってテンポや拍子の変化はあるものの、組曲の第１曲に位置することが多い。付点や３連音符が入り混じる、重々しい楽章。ドゥーブルは、一転して 16 分音符で構成され、スラーが印象的である。



第２楽章のコレンテは３拍子の舞曲。８分音符で構成され、音の上がり下がりが激しく、３つの音のスラーが全体を支配する。ドゥーブルにはプレストの記載があり、16 分音符で音の起伏はそのままに、テンポが速くなる。

第３楽章のサラバンドは３拍子のゆったりとした舞曲。リズムの変化のある本編に対し、ドゥーブルは８分音符で構成される。

第４楽章のテンポ・ディとは「〜のようなテンポで」という意味で、ボレアとは速い２拍子の舞曲である。この楽章もドゥーブルは８分音符で構成され、ここでも本編との見事な対比が見られる。

（文／三瀬 俊吾）

桑原ゆう／演奏会用組曲「セロ弾きのゴーシュ」（2019）

1. 序曲　2. ドレミファの稽古　3. 愉快な馬車屋
4. 印度の虎狩　5. 何とかラプソディ

この作品は、もともと、諸橋精光さんの巨大紙芝居「セロ弾きのゴーシュ」の上演のために、ステージ用の付随音楽として作曲しました。初演のチェリストである佐藤翔さんと私を、諸橋さんに推薦くださったのが、ほかでもない、安養院の平井御住職です。「セロ弾きのゴーシュ」の紙芝居は、2019 年 11 月３日に、安養院の本堂で初演されました。そのステージ用音楽の一部を、コンサートレパートリーとして、演奏だけで成り立つように整理したのが、《演奏会用組曲「セロ弾きのゴーシュ」》です。

宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」の物語は、金星音楽団が「第六交響曲」をリハーサルしている場面から始まります。誰の「第六交響曲」なのかは述べられていませんが、ベートーヴェンの《第六交響曲「田園」》だといわれています。それを踏まえ、全ての音楽を「田園」から引用した素材により作曲しました。

冒頭のシーンに合わせて書いたプレリュード。「ちがひます。そんなんでないんです。」なんてカッコウに言われながら、ドレミファを稽古するゴーシュ。「愉快な馬車屋」、「印度の虎狩り」、「何とかラプソディ」は、作品中でゴーシュが演奏する楽曲のタイトルです。賢治はどんな音楽を思い描いていたのだろうと想像しながら、架空の楽曲を現実のものにしていく作業は、とても楽しく筆が進みました。今夜は、ぜひ「セロ弾きのゴーシュ」を読み返していただけたらと思います。

（文／桑原 ゆう）